消えない過去、紡ぐ未来

一宮中・3　鈴木　里桜

石垣りんさんの詩に隠された
痛みと悲しみ
描かれた非情さから伝わる
彼女は耳を澄ませる
写真の中の無言の叫びに

広島の空に咲いたきのこ雲
一瞬で全てを変えてしまった
家族の笑顔、未来の夢
瓦礫の中に消えた日常が
静かに、しかし確かにそこにあった

石垣さんの言葉は鋭く
心の奥深くまで突き刺さる
写真を見ているという現実味
毎日の午前八時十五分が暗示する原爆
詩の一行一行が
深い考えを私たちに投げかける

瓦礫の中に散らばる日常
生きた証が消えてしまったとしても
私たちがその記憶を胸に刻み
未来に伝えていかなければならない
過去の悲しみを

絶対になかったものにしてはいけない

今も地球上には多くの原爆が在り
戦争の火種は絶えない
平和への道はまだ遠い
私たちが油断して生きる中で
悲劇はいつでも起こりうる
その現実を忘れてはいけない

原爆の犠牲になってしまった人々もまた
同じように油断していたのだ
その悲劇から学ぶ教訓を
私たちは受け継ぐ責任がある
私たちへの挨拶から
私たちへの戒め
平和への願い
未来へ向けて
私たちが受け継ぐべき教訓と使命

過去の悲しみを超えて
新しい平和の道を歩むために
石垣りんさんの詩が問いかける
その答えを見つける旅をしてみないか

悲劇はいつでも起こりうる
その現実を胸に危険を認識すべきだ
みんなで平和を守り築こう

いつの日かこの地球上の誰もが

「平和だね」
と笑顔で言える日を目指してみないか
未来を創り出すための一歩を
今、ここから踏み出すのだ

3・9